

# 19世紀アメリカンボードの宣教思想Ⅱ

## 1851-1880 (4)

塩野和夫

### 第2章 アメリカンボード<sup>1)</sup>本部の宣教方針

#### はじめに

19世紀アメリカンボードの第2期(1851-1880)におけるボード本部の宣教方針を探る手掛かりとして何があるだろうか。1850年代以降、ほぼ第2期を通じてヘラルド誌1月号の冒頭に記載された‘Annual Survey of the Mission of the Board.’<sup>2)</sup>は、ボード本部の宣教方針を知る有力な手掛かりの一つとなるであろう。

‘Annual Survey’は、ヘラルド誌(*Missionary Herald*)1月号の冒頭に置かれている。ところが、主要な内容は前年の活動内容や宣教師等の異動と特色である。なぜ、前年の概要がヘラルド誌新年号の冒頭を飾ることになるのか。そこで‘Annual Survey’の執筆者<sup>3)</sup>がこの記事に与えた性格に言及しなければならない。そもそも1年間に及ぶ膨大なアメリカンボードの活動内容全体をわずか10数頁にまとめることはできない。なお、‘Annual Survey’は、基調報告と各地域のミッション報告からなっている。本稿で主に扱う基調報告はわずか2頁か3頁である。したがって、基調報告の内容は執筆者の宣教活動理解に基づいている。執筆者の宣教活動理解によって膨大な報告は取捨選択され、分析され、展望が示される。このようにして、前年の宣教活動報告が新しい年の展望を示す‘Annual Survey’とされたのである。

第2期の中に‘Annual Survey’の内容には明らかな変化が認められる。たとえば、初期（1851-60）には小説教ともいべき性格が顕著である。南北戦争期（1861-65）には、財政問題が課題となった。さらに、展開期（1866-80）には「現地人による宣教活動への移行」という課題が着実に実現し、新たな展開を認めることができる。

そこで、‘Annual Survey’を検討するにあたって第2期を下記の通り3区分し、ボード本部の宣教方針を考察する。

1. 初期（1851-60）の‘Annual Survey’
2. 南北戦争期（1861-1865）の‘Annual Survey’
3. 展開期（1866-80）の‘Annual Survey’

## 1. ‘Annual Survey’に見るボード本部の宣教方針

### (1) 初期（1851-60）の‘Annual Survey’<sup>4)</sup>

ヘラルド誌に掲載された初期‘Annual Survey’の基調報告に認められる際立った特色は、小説教的体裁である。1851年1月号の場合をみておこう。

基調報告は「全般的状況報告・現地ミッション報告・宣教師等の異動・結び」という構成である。初めの「全般的状況報告」には、「起きよ、光を放て。あなたを照らす光は昇り、主の栄光はあなたの上に輝く。見よ、闇は地を覆い、暗黒が国々を包んでいる。しかし、あなたの上には主が輝き出で、主の栄光があなたの上に現われる。国々はあなたを照らす光に向い、王たちは射出するその輝きに向かって歩む」（イザヤ書60章1-3節<sup>5)</sup>）を含む聖書の言葉が3か所引用されている。「宣教師等の異動」は「聖霊の尊い働きは宣教活動において抑制されることはない」を導入の言葉とし、彼らの活動が聖霊の力による事実を印象付けている。さらに「結び」は「宣教活動の希望、世界のあらゆる希望は神にある。神は求める人々に知恵と恵みを与えられる。彼らはその活動によって神の御旨を行う」と結んでいる。聖書の引用・聖霊の働きの強調・宣教活動への招き、これらは基調報告がキリスト教の礼拝における説教に準じる体

裁であることを語っている。

‘Annual Survey’で主要な内容になる前年の報告に関してはどのように言えるのか。前年の報告内容は前期においてはまちまちであり、定式化されていない。たとえば、最も多く報告されている現地ミッションの報告である。現地ミッションの活動に関する報告は、わずかに「1851年・1856年」の‘Annual Survey’に掲載されているだけである。それに対して現地ミッションの困難な状況が、「1852年・1855年・1858年・1859年」の‘Annual Survey’に報告されている。「1853年・1854年・1857年」の‘Annual Survey’は、現地ミッションの状況変化を伝えている。宣教師等の異動に言及しているのは、「1851年・1856年」の‘Annual Survey’だけである。このように現地ミッションの報告が定式化されていないのは、前期の‘Annual Survey’がまだ初期の段階であった事実を示している。同時に、内容はともかくとして各ミッション報告がほぼ毎号掲載されていたことは、‘Annual Survey’における現地ミッション報告の重要性を語っている。

現地ミッション報告と比較して際立った特色を見せているのが、宣教活動の方法に関する記述である。前年の宣教活動を踏まえ新しい年の指針として宣教活動の方法は述べられる。当時、各ミッションは伝道をはじめ教育・医療・出版など幅広い活動を繰り広げていた。ところが、前期の‘Annual Survey’で認められる宣教方法は、「説教 (preach)」を主要な方法とする伝道活動にほぼ限定している。

「少なくとも、福音を説教するための道を準備する」(1851年)

「すべての被造物に福音を宣べ伝えなさい (preach)。」(1854年)

「しかし、宣教 (preach) の愚かさによって信じる者を救う」(1857年)

「偉大な信仰の覚醒、神の摂理の進展は、福音を説教する者たちによって彼らが派遣された国々に起こる」(1859年)

「伝道する霊、それはすべての国々で教え、あらゆる被造物に福音を説教しようとする抑えることのできない望みを伴って燃える霊である」(1860年)

「説教」を中心にした伝道方法は、現地ミッションの活動を踏まえながらも新しい方向を示していた。ここにボード本部の伝道活動に関する指針が明快に示されている。すでに、第1期（1810-50）の末期にボード本部は教育や医療の活動を抑制し、伝道活動に重心を移していた。その立場が‘Annual Survey’における「説教」を中心とした伝道方法に現われたのである。

初期（1851-1860）の‘Annual Survey’に現われた特色は、いずれも当時のボード本部の立場を反映している。「説教」を主要な手段とした方法の一元化は、伝道活動を重視した本部の姿勢を示していた。同じことが‘Annual Survey’に認められた小説教的な体裁にも指摘できる。霊の顕著な働きである説教は海外においては伝道活動を推進し、国内においては人々を海外伝道活動へと招いた。そうであればこそ、ボードの機関誌であるヘラルド誌1月号の冒頭におかれた‘Annual Survey’は小説教的体裁がふさわしかった。説教を重視する姿勢は他方、各ミッションの報告内容を整える努力を怠る結果となった。そのため現地ミッションの報告内容はまちまちとなった。けれども、初期の‘Annual Survey’に認められた特色は、いずれも初期という時期を越えることはなかった。小説教的体裁はすでに1858年の‘Annual Survey’から弱まり、南北戦争期の‘Annual Survey’には認められない。説教を中心的手段とした伝道方法の強調も、南北戦争期以降では弱められ相対化されていく。逆に現地ミッションの報告は重視され、充実していく。

## (2) 南北戦争期（1861-65）の‘Annual Survey’<sup>6)</sup>

南北戦争期の‘Annual Survey’に定型は認められない。他方、前期の特色であった小説教的体裁をとることもない。要するにこれまで重視してきた小説教的体裁を継承せず、かといってそれに代わる新たな定型を生み出すにも至っていない。この時期の‘Annual Survey’には混乱が生じている。それは南北戦争によってアメリカンボードの宣教指針に動揺が生じた結果であろう<sup>7)</sup>。

南北戦争がボードの活動にもたらした混乱の一つに財政問題がある。ヘラルド誌は1862年1月号の冒頭に‘Annual Survey’に代えて「1862年度の予算

(Appropriations for 1862)』<sup>8)</sup>を置いている。財政問題が緊急の重要課題となったためであろう。概要は次の通りである。

「私たちは内乱のただ中にあり、乏しい収入しか得られなかった。そのため、新年度に負債が生じている。そこで、ボードを安定的に維持し、海外宣教活動を救済するために、1862年度の支出に341,377ドルを充てる。これは前年度より30,000ドル程少ない。しかし、これに加えて27,880ドルを負債の返済に充てるので、予算額合計は369,223ドルとなる。」

新年度においても内乱のため収入の減少が予測された。しかし、ボードはほぼ前年度並みに収入の予算を組む。当然、予算達成には困難が予想されたが、それはボードの安定的な経営と海外宣教活動の確かな継続を保証するためであった。そこで、困難な目標を達成するために1862年1月号ヘラルド誌の冒頭に「1862年度の予算」を置き、支持者の理解と協力を訴えたのであろう。ただし、前年度並みの収入が確保されても、負債返済のため宣教活動に支出できる金額は10パーセント程度減額された。これは現地の活動にはかなりの打撃となったであろう。財政問題が‘Annual Survey’で再び取り上げられたのは、1865年1月号<sup>9)</sup>である。概要は次の通りである。

「1861年度にボードは28,000ドル近い負債を抱えた。巨大な出費を伴う戦争を3年も続けた後、現在、絶えず成長する海外における宣教活動すべての費用を支払い、今年度は財政上の収支をほぼ過不足なく終わった。」

内乱が勃発した初年度にボードは収入不足のため多額の負債を抱えた。それはボードの運営と海外での宣教活動に財政面からの危惧となった。これが南北戦争期の財政問題である。ところが、意外に早く問題の克服が報じられる。1865年1月号の‘Annual Survey’は、内乱が3年続いていた時点で問題の解決を伝えている。南北戦争がなお継続していた時点で財政問題は解決した。ヘラルド誌の訴え等がボード支持者の関心を高めた結果であろう。

南北戦争期の‘Annual Survey’で最も多く報道されている内容は、死者の報告を含む異動である。何らかの形で異動を伝えている記事は、「1861年・1862年・1863年・1864年」の‘Annual Survey’に見られる。比較的詳しく報じて

いる「1861年・1864年」の異動報道の概要は次の通りである。

「昨年、死者は2名だけであった。サタラ（Satara）で活動していたウッド氏（Mrs. Wood）とネストリアン・ミッション（Nestorian Mission）のトンブソン氏（Mr. Tompson）である。12名の男性と14名の女性が初めて海外のミッション活動に参加するために旅立った。健康を回復した2名の牧師とその夫人は再び海外の活動地へ出かけて行った。アメリカ合衆国に帰国していた4名の男性と5名の女性が再び海外の活動地に戻った。」（1861年 ‘Annual Survey’）<sup>10</sup>

「死亡が確認されたのはD. C. スカッター氏（Rev. D. C. Scudder）である。彼は1862年11月に亡くなっていた。ミッションで働く家族の間で数名の子供が亡くなっていたが、人数は分からない。1863年に死亡した大人は1人である。多くは健康を害したためであるが、帰国中の者は17名いる。帰国していた14名（男性が7名、女性が7名）は再び海外の活動地に戻った。16名の新しい活動者（男性が6名、女性が9名）が海外へ旅立った。」（1864年 ‘Annual Survey’）<sup>11</sup>

異動報告でまず報道される死者は、例外を除いて氏名と活動地が記される。それ以外に、新しく海外の宣教活動地へ赴任していく者の人数、病気などの理由で帰国していたが再び海外の宣教活動地へ復帰した者の人数、帰国中の活動者の人数などが報じられている。報告内容が一定しない南北戦争期の ‘Annual Survey’ で、異動報告だけは例外的に多く記載される。それはヘラルド誌の読者が、彼らの関係者を含んでいた可能性のある異動報告に強い関心を寄せたためであろう。しかし、異動報告が前期の小説教的体裁に代わることはない。異動報告がヘラルド誌の読者に海外宣教活動への参与を強く呼びかける契機を持たなかったためである。

南北戦争期を通じて、前期の小説教的体裁に代わり一貫して強調された内容はない。この時期の ‘Annual Survey’ が定型を持たず、内容的にも混乱していたためである。しかし、南北戦争期に入って印象深く報道されている事柄がある。海外における宣教活動の全体像を数値で表現しようとする試み（以下、「海外の宣教活動数値報告」と略記する）で、「1861年・1864年」の ‘Annual Survey’ が掲載している。概要は次の通りである。

「1,000名以上がこの1年間にミッションの教会に加わった。新たに按手礼を受けた現地人牧師 (native pastor) がいる。現地人説教者 (native preacher) は91名, 現地人伝道者 (native catechist) は104名報告されている。11の神学校と13の寄宿学校, 350近い小学校には10,000名ほどの生徒が学んでいる。」(1861年 ‘Annual Survey’)<sup>12)</sup>

「アメリカ合衆国から400名がボードの海外宣教活動に従事している。海外のミッションステーションは112, その他にアウトステーションがある。現地人協力者は211名いる。36名の現地人牧師, 233名の現地人説教者 (伝道者を含む), 268名の学校教師, その他に協力者が200名いる。」(1864年 ‘Annual Survey’)<sup>13)</sup>

前期の ‘Annual Survey’ における小説教的体裁と南北戦争期のそれにおける「海外宣教活動の数値報告」を3点で比較検討する。第1は前期に小説教的要素が一貫して強調されたのに対し, 南北戦争期の「海外宣教活動の数値報告」は2度しか見られない点である。これは前期における小説教的体裁の立場を南北戦争期の「海外宣教活動の数値報告」が獲得していない事実を示している。第2に小説教的体裁は説教というキリスト教独自の方法あるいは力を用いて, ヘラルド誌読者に海外宣教活動への参与を促していた。それに対して, 「海外宣教活動の数値報告」は海外宣教活動の現実を数値で示す方法でヘラルド誌の読者に海外宣教活動への参与を促した。方法は異なるが海外宣教活動への参与を促した点で共通している。第3に「海外宣教活動の数値報告」に「現地人牧師」「現地人説教者」「現地人伝道者」など, 海外宣教現場における新しい動向が数値で示されている点である。現地における宣教活動の担い手の育成は, アメリカンボードの基本的な宣教方策であった。したがって, ボードの宣教方策が現地で着実に進展していた事実を新しい動向は語っている。

南北戦争期の ‘Annual Survey’ に認められる特色は内容上の混乱である。南北戦争勃発当初に発生したボードの財政問題は, この混乱を端的に語っていた。しかし, 戦争継続中に早くも財政問題は解決した。それはボードの経営と海外宣教活動継続の安定的な維持を保証した。ところで, 南北戦争期の ‘Annual

Survey’ に新しく登場した報告事項に、「海外宣教活動の数値報告」がある。それは前期の小説教的体裁と同様にヘラルド誌読者を海外宣教活動への参与に促した。報告の中で強調された「現地人牧師」を初めとする現地人協力者は展開期（1871-80）の‘Annual Survey’では中心的な報告事項となっていく。このように見てくると、南北戦争期は展開期への移行期として捉えることもできる。

### (3) 展開期（1866-80）の‘Annual Survey’<sup>14)</sup>

展開期（1866-80）の‘Annual Survey’にはいくつかの重要な展開が認められる。これらはそれぞれにボードの宣教方針を反映している。まず、牧師を初めとした現地人協力者の重視である。彼らは順調に推移した海外宣教活動の担い手としても報告される。次いで注目されるのが女性である。南北戦争期に海外宣教活動に参加する人数では女性が男性と並んでいた。展開期では女性の活動が紹介される。いくつかの活動分野における女性の働きは重要性を持ち始めていた。さらに活動内容として説教をはじめ、教育・印刷・医療などが幅広く報告される。これは説教を重視した前期では考えられない。宣教活動を多様に捉えようとする立場の反映である。なお、「1871年・1872年」の‘Annual Survey’は、長老派のアメリカンボードからの離脱と海外における4ミッションの長老派ミッションへの移管を報じている。

展開期の‘Annual Survey’で現地人の担い手を報告しない年はない。彼らは毎年報告され、しかも宣教活動の重要な進展の中核として位置付けられた。「1868年・1872年」の‘Annual Survey’における現地人担い手の報告概要は次の通りである。

「ミッションからの報告によると、ミッションの教会はこの1年で15増えて220となった。現地人牧師は17名増え、101名となった。教会の自立を教えられて献金が増え、自給教会で働く現地人牧師が着実に増加した。ミッション教会で自立した自給教会は52を数える。」（1868年‘Annual Survey’）<sup>15)</sup>

「ミッションの教会にこの1年間で919名が新しく加わり、按手礼を受けて



現地人牧師となった者が9名以上いる。教育を受けた現地人聖職者、よく組織された自給教会、それに現地人キリスト教徒による活動がある。彼らの活動により人々の間における精神面や倫理面など、幅広い分野で向上が認められる。」(1873年 ‘Annual Survey’)<sup>16)</sup>

いずれの報告も順調な推移を教会数や会員数などの増加を根拠に語っている。その上で、1868年の ‘Annual Survey’ は「自給教会が52を数え」、自給教会で働く「現地人牧師が着実に増えている」と報告する。これは、ボードの基本方針であった現地人によるミッション教会の自立と自給の進展を語っている。1873年の ‘Annual Survey’ は現地人キリスト教徒の活動により「精神面や倫理面など幅広い分野で向上が認められる」と伝える。海外宣教地における精神性や倫理性はボードがたびたび問題として取り上げてきた事柄である。報告によると、現地人によるキリスト教活動はこのような問題に対しても好ましい影響を及ぼしていた。

1868年の ‘Annual Survey’ 以来女性宣教師の活動をしばしば報告している。「1868年・1876年」の ‘Annual Survey’ に掲載された女性の活動報告の概要は次の通りである。

「他に特別に注意すべき話題は、女性に宣教活動の場が開かれていることである。この1年に設立された3つの寄宿学校に、9名の独身女性が派遣された。彼女たちのうち2名、マドゥラ (Madura) にいるポロック氏 (Miss Pollock) と西トルコ (Western Turkey) にいるクロースン氏 (Miss Closson) は伝道活動に従事している。家々を回り、女性と子供を集めて、キリストの物語を話している。」<sup>17)</sup>

『女性のための女性の働き』は大きな成果をあげている。アメリカ合衆国における女性キリスト教徒の熱心と献身は、海外伝道地域においても成果をもたらしたと伝えられている。独身女性だけでなく、宣教師夫人も役割を担っている。インドからウィンザー氏 (Mrs. Winsor) が、異邦人に『毎日来てイエスを教えてください』と言われるのは何と良いことでしょうかと書いている。マラシュ (Marash) のモントゴメリー氏 (Mrs. Montgomery) は『もし多くの人

を集めたいなら、母親に呼びかけるとよい』と異邦人から言われている。』<sup>18)</sup>

1868年の‘Annual Survey’は派遣された9名の独身女性宣教師の活動内容に言及する。それによると、彼女たちは寄宿学校における活動だけでなく、女性や子供を対象にした伝道活動に従事している。1876年の‘Annual Survey’によると、「女性のための女性の働き」が成果をあげている。その上で、「毎日来てイエスを教えてください」と依頼する異邦人の声と母親への呼びかけをめぐる異邦人の声を伝えている。海外宣教活動の進展に伴い、これらの記事は女性に適した活動の場が展開期に開拓されていた様子を伝えている。

展開期における‘Annual Survey’のもう一つの特徴は、説教以外の活動方法を取り上げていることである。教育活動に関しては1868年の‘Annual Survey’で現地人の活動の中で彼らの教育活動を取り上げ、女性に関する報告では寄宿学校を取り上げていた。それ以来教育活動については報告されているが、「1875年・1876年」の‘Annual Survey’は活動方法の全体像を伝えている。それぞれの概要は次の通りである。

「ボードの教育活動は、訓練学校・学校・師範学校・神学校・大学によって担われ、1年間に9万ドル以上を支出している。キリスト教の文書活動は、聖書と実践的な宗教書を中心に昨年は20,376ドル支出した。1873年にボードは95か所の礼拝堂を建設するために18,596ドルを支出した。その他に医療部門に関しては特別な言及が必要である。」(1875年‘Annual Survey’)<sup>19)</sup>

「ボードの教育施設は活発に活動している。印刷事業もいつものように多忙である。宣教医は良いサービスをしており、多くの隣人と家族に道を開く働きをしている。」(1876年‘Annual Survey’)<sup>20)</sup>

1875年の‘Annual Survey’は支出額からそれぞれの事業規模を報告している。すなわち、教育事業に9万ドル以上、文書活動に20,376ドルを支出し、礼拝堂の建設には18,596ドルを支出している。教育部門と文書活動を合わせた支出110,376ドルは、1874-75会計年度の支出総計に対して23%を占める<sup>21)</sup>。1876年の‘Annual Survey’は説教以外の活動の様子を伝えている。それによると「教育施設は活発に活動し」、「印刷事業はいつものように多忙で」あり、

「宣教医は良いサービスをしている」。いずれも好意的な報告である。初期の‘Annual Survey’における活動方法は説教中心で、それ以外の報告はなかった。しかし、それは報告がなかっただけであって、活動がなかったわけではない。それに対して展開期の‘Annual Survey’は活動の全体像を伝えている。報告内容の変化はボードの宣教方針の変化を反映している。

展開期の‘Annual Survey’は順調な海外宣教活動の推移を背景とする。しかも、そのような報告内容はいつも現地人キリスト教徒・キリスト教活動の担い手・ミッション教会とその自給など現地人の活動を中核とした。なかでも現地人担い手の増加はキリスト教活動の主体がアメリカ人宣教師から現地人へと推移した事実と対応する。同じ時にアメリカ人宣教師の中にも変化が現れた。女性宣教師の増加と活動分野の確立である。すでに南北戦争期に女性宣教師の人数は男性に匹敵していた。それが展開期に入ると教育分野などで女性宣教師の活動の場が確立するようになる。展開期にはまた教育・印刷・医療などの活動分野が好意的に報告される。このような変化にはボード本部の宣教方針の変化とともに、展開期には宣教活動が順調に推移した背景があるだろう。

## おわりに

19世紀アメリカンボード第2期(1851-1880)における‘Annual Survey’は、初期・南北戦争期・展開期とそれぞれに特色をもった報告をし、しかもそれらは変化していた。初期の報告の特色は説教の重視であり、‘Annual Survey’自体が小説教的体裁をとっていた。南北戦争期には財政問題をはじめとした困難に直面し、それが‘Annual Survey’の形式の混乱となった。そこから新しく登場したのが宣教地の全体的報告であり、なかでも現地人でキリスト教活動を担う人々の報告であった。展開期にこの変化は定着し、さらに女性の活動や教育・印刷・医療など多様な活動方法も報告される。

初期・南北戦争期・展開期に見られた報告内容の変化はボード本部の宣教方針の変化を反映している。すなわち、初期には説教を中心とした伝道活動が宣

教方法の中心であり、最も重んじられた。南北戦争期には説教という方法に変わり、宣教活動の確かな成果が重んじられる。現地人キリスト教徒や現地人担い手の登場である。ただし、現地人の活躍はボード本来の宣教方策に基づいている。さらに展開期に新しく報告される女性の活動や教育・印刷・医療などによる宣教活動の多様化もボード本部の宣教方針の変化に即している。

初期・南北戦争期・展開期に認められるボード本部の宣教方針の変化は、ヘラルド誌読者すなわちボード支持者の関心の変化に対応している。初期に見られた‘Annual Survey’の小説教的体裁は、当時支持者の関心を海外宣教活動に向ける力を有した。同様に南北戦争期には海外宣教活動の現場における確かな成果が支持者をして活動への参与を促す力を有した。南北戦争後のアメリカでは社会における女性の活動が関心を呼び、北部では広く社会に関心が向けられた。このようなアメリカの状況は展開期における‘Annual Survey’の特色、女性の活動報告や社会に開かれた宣教活動の多様性に対応している。

## 注

- 1) ‘American Board of Commissioners for Foreign Missions’は従来「アメリカン・ボード」と表記されていた。本稿では中黒を取って「アメリカンボード」としているが、その理由を述べておきたい。まず、アメリカンボードという表記は略称あるいは呼称である。正式に名称を翻訳するならば「アメリカ海外伝道委員会」とでもすべきであろう。それは長いので、多くの場合「アメリカンボード」という略称が通用してきた。第2に、「アメリカン」が文法では第2格である点である。2格である「アメリカン」に中黒「・」を入れて「ボード」とつなぐのは不自然である。第3は音声である。‘American Board of Commissioners for Foreign Missions’を話し言葉では、‘American Board’と略称で表現することが多い。その場合、‘American’と話してから中黒「・」に相当する間をとって‘Board’とは言わないで、‘American’から‘Board’を続けている。これらを総合的に考慮して本稿では「アメリカンボード」とした。
- 2) ヘラルド誌において‘Annual Survey’は、第2期にどのような位置づけを持っていたのであろうか。ヘラルド誌がボードの機関誌であったこと、毎年新年号の1頁に置かれたこと、‘Annual Survey’として新しい年の指針を示したこと、執筆者はボードの方針を尊重していたことなどから、新しい年に当たってボード当局の伝道指針を示していたと考えられる。なお、‘Annual Survey’がヘラルド誌に初めて登場する

のは1844年であり、1876年を最後としている。

3) 1869年の‘Annual Survey’は、前年におけるアメリカンボード年会での海外担当幹事 (the Foreign Secretary) の報告内容について言及し、それと‘Annual Survey’の関わりを示唆している。したがって、‘Annual Survey’の執筆者はボード当局に近い立場にいたと推測できる。

4) 第2期の初期(1851-60)に掲載された‘Annual Survey’のヘラルド誌における掲載場所は次の通りである。

‘Annual Survey of the Missions of the Board. January, 1851.’ *The Missionary Herald, January 1851.* pp.1-15.

‘Annual Survey of the Missions of the Board. January, 1852.’ *The Missionary Herald, January 1852.* pp.1-14.

‘Annual Survey of the Missions of the Board. January, 1853.’ *The Missionary Herald, January 1853.* pp.1-13.

‘Annual Survey of the Missions of the Board. January, 1854.’ *The Missionary Herald, January 1854.* pp.1-14.

‘Annual Survey of the Missions of the Board. January, 1855.’ *The Missionary Herald, January 1855.* pp.1-14.

‘Annual Survey of the Missions of the Board. January, 1856.’ *The Missionary Herald, January 1856.* pp.1-12.

‘Annual Survey of the Missions of the Board. January, 1857.’ *The Missionary Herald, January 1857.* pp.1-12.

‘Annual Survey of the Missions of the Board. January, 1858.’ *The Missionary Herald, January 1858.* pp.1-12.

‘Annual Survey of the Missions of the Board. January, 1859.’ *The Missionary Herald, January 1859.* pp.1-12.

‘Annual Survey of the Missions of the Board. January, 1860.’ *The Missionary Herald, January 1860.* pp.1-13.

5) 聖書については、日本聖書協会『聖書 新共同訳』(1987年)を使用した。

6) 南北戦争期(1861-65)に掲載された‘Annual Survey’のヘラルド誌における掲載場所は次の通りである。

‘Annual Survey of the Missions of the Board. January, 1861.’ *The Missionary Herald, January 1861.* pp.1-13.

‘Annual Survey of the Missions of the Board. January, 1862.’ *The Missionary Herald, January 1862.* pp.7-17.

‘Annual Survey of the Missions of the Board. January, 1863.’ *The Missionary Herald, January 1863.* pp.1-11.

‘Annual Survey of the Missions of the Board. January, 1864.’ *The Missionary Herald,*

*January 1864. pp.1-12.*

‘Annual Survey of the Missions of the Board. January, 1865.’ *The Missionary Herald, January 1865. pp. 1-12.*

7) ‘Annual Survey’には、「1862年・1863年・1864年・1865年」に4度南北戦争への言及がある。そこでは戦争を「不信心な内乱 (unhallowed rebellion)」（1862年）, 「邪悪な内乱 (wicked rebellion)」（1863年）, 「国家としての存在と高潔さを保つための戦い (struggle for our national existence and integrity)」（1864年）, 「たいへんな戦い (fearful struggle)」（1865年）としている。

*The Missionary Herald, January 1862. p.7.*

*The Missionary Herald, January 1863. p.2.*

*The Missionary Herald, January 1864. p.1.*

*The Missionary Herald, January 1865. p.1.*

8) *The Missionary Herald, January 1862. pp.1-2.*

9) *The Missionary Herald, January 1865. p.1.*

10) *The Missionary Herald, January 1861. p.1.*

11) *The Missionary Herald, January 1864. p.1.*

12) *The Missionary Herald, January 1861 pp.1-2.*

13) *The Missionary Herald, January 1864. p.2.*

14) 展開期（1866-80）に掲載された‘Annual Survey’のヘラルド誌における掲載場所は次の通りである。

‘Annual Survey of the Missions of the Board. January, 1866.’ *The Missionary Herald, January 1866. pp.1-12.*

‘Annual Survey of the Missions of the Board. January, 1867.’ *The Missionary Herald, January 1867. pp.1-11.*

‘Annual Survey of the Missions of the Board. January, 1868.’ *The Missionary Herald, January 1868. pp.1-12.*

‘Annual Survey of the Missions of the Board. January, 1869.’ *The Missionary Herald, January 1869. pp.5-17.*

‘Annual Survey of the Missions of the Board. January, 1870.’ *The Missionary Herald, January 1870. pp.7-18.*

‘Annual Survey of the Missions of the Board. January, 1871.’ *The Missionary Herald, January 1871. pp.1-12.*

‘Annual Survey of the Missions of the Board. January, 1872.’ *The Missionary Herald, January 1872. pp.5-14.*

‘Annual Survey of the Missions of the Board. January, 1873.’ *The Missionary Herald, January 1873. pp.1-11.*

‘Annual Survey of the Missions of the Board. January, 1874.’ *The Missionary Herald,*

January 1874. pp.4-15.

‘Annual Survey of the Missions of the Board. January, 1875.’ *The Missionary Herald, January 1875.* pp.1-13.

‘Annual Survey of the Missions of the Board. January, 1876.’ *The Missionary Herald, January 1876.* pp.1-12.

‘Annual Survey’ は 1876 年が最後となっている。これはヘラルド誌における ‘Annual Survey’ に対する評価が変わったためだと考えられる。

15) *The Missionary Herald, January 1868.* p.5.

16) *The Missionary Herald, January 1873.* p.1.

17) *The Missionary Herald, January 1868.* p.2.

18) *The Missionary Herald, January 1876.* p.2.

19) *The Missionary Herald, January 1875.* pp.2-3.

20) *The Missionary Herald, January 1876.* p.2.

21) 1874-75 会計年度の収入合計は 47 万 5,878 ドル 61 セントであった。

‘Appropriations for 1876.’ *The Missionary Herald, December 1876.* pp. 371-372.